

令和4年度

「ヤングケアラー実態調査」報告書

【概要版】

令和5年3月31日

大仙市

第1 はじめに

1 調査概要

【本編p.4】

(1) 目的

本市におけるヤングケアラーの存在、困りごとや支援ニーズ等を含めた実態を把握するとともに、今後の施策立案、支援体制強化のための基礎資料とすることを目的とする。

(2) 期間

令和4年8月29日（月）～9月12日（月）

(3) 対象

市内の学校に在学している小学4～高校3年生及びその学校

区分	学年	対象者数
小学校20校	小学4～6年生	合計 1,585人
中学校10校	中学1～3年生	合計 1,730人
高等学校 (分校、私立含む)6校	高校1～3年生	合計 1,638人

(4) 種類

- ① 個別調査
(学生¹の生活実態に関するアンケート調査)
児童生徒個人々々人に対して、普段の学校生活や行っているお世話の内容、ヤングケアラーの認知度等を調査する。
- ② 学校調査
(学校におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査)
市内の各学校に対して、ヤングケアラーに対する支援の実情、今後必要と思われる支援等を調査する。

(5) 設問数

- ① 個別調査： 全 28 問
- ② 学校調査： (小・中学校) 全 11 問 (高等学校) 全 19 問

(6) 回答方法

原則、オンライン回答とする。（紙の調査票での回答も可）

(7) 集計方法

個別調査は回答者を特定しない無記名回答とし、学校調査は学校名のみ回答し、集計については統計的に処理する。

第1 はじめに

2 回答数及び回答率

【本編p.5】

(1) 個別調査

区分	対象数(人)	有効回答数(人)	回答率(%)
小学生	1,585	998	63.0
中学生	1,730	1,331	76.9
高校生	1,638	665	40.6
合計	4,953	2,994	60.4

(2) 学校調査

区分	対象数(校)	回答数(校)	回答率(%)
小学校	20	20	100.0
中学校	10	10	100.0
高等学校	6	6	100.0
合計	36	36	100.0

第2 学生の生活実態に関するアンケート調査

お世話をしている家族の有無

【本編p.39】

本市におけるお世話をしている家族がいる子どもの割合は、小学生で2.9%（国6.5%）、中学生で1.6%（国5.7%）、高校生で1.4%（国4.1%）で、いずれの学校区分においても、国の調査結果より低くなった。

	上段:人 下段:%	同じ家に住んでいる家族の中にいる	同じ家に住んでいる家族の中にはいないが、ほかにいる	いない	無回答	計
小学生		23	6	946	23	998
		2.3	0.6	94.8	2.3	100.0
中学生		19	3	1,289	20	1,331
		1.4	0.2	96.8	1.5	100.0
高校生		8	1	651	5	665
		1.2	0.2	97.9	0.8	100.0
合計		50	10	2,886	48	2,994
		1.7	0.3	96.4	1.6	100.0

第2 学生の生活実態に関するアンケート調査

お世話の対象

【本編p.42】

お世話の対象については、全ての学校区分で「弟・妹」の割合が最も多くなっている。

	父親	母親	祖母	祖父	兄・姉	弟・妹	その他	無回答	計
上段:人 下段:%									
小学生	0	1	5	3	0	19	5	6	39
	0.0	2.6	12.8	7.7	0.0	48.7	12.8	15.4	100.0
中学生	3	4	5	1	0	16	4	4	37
	8.1	10.8	13.5	2.7	0.0	43.2	10.8	10.8	100.0
高校生	0	1	2	2	2	3	1	0	11
	0.0	9.1	18.2	18.2	18.2	27.3	9.1	0.0	100.0
合計	3	6	12	6	2	38	10	10	87
	3.4	6.9	13.8	6.9	2.3	43.7	11.5	11.5	100.0

第2 学生の生活実態に関するアンケート調査

お世話の内容(複数回答)

【本編p.46】

お世話の内容については、「食事の準備や掃除、洗濯などの家事」や「入浴やトイレのお世話などの身体的な介護」等の負担の大きい内容についても全体で2割以上を占めている。

	食事の準備や掃除、洗濯などの家事	入浴やトイレのお世話などの身体的な介護	きょうだいの世話や保育所等への送迎など	買い物や散歩などの外出の付き添い	通院の付き添い	話し相手になるなどの感情面のサポート	目を離せない家族の見守り	日本語や手話などの通訳	金銭管理	薬の管理	生活費のためのアルバイト	その他	集計対象数※
上段:人 下段:%													
小学生	8	12	4	2	0	12	19	0	1	2		3	39
	20.5	30.8	10.3	5.1	0.0	30.8	48.7	0.0	2.6	5.1		7.7	—
中学生	14	7	7	10	3	7	10	2	0	3		4	37
	37.8	18.9	18.9	27.0	8.1	18.9	27.0	5.4	0.0	8.1		10.8	—
高校生	3	2	2	0	0	1	6	0	0	0	0	1	11
	27.3	18.2	18.2	0.0	0.0	9.1	54.5	0.0	0.0	0.0	0.0	9.1	—
合計	25	21	13	12	3	20	35	2	1	5	0	8	87
	28.7	24.1	14.9	13.8	3.4	23.0	40.2	2.3	1.1	5.7	0.0	9.2	—

※ ここでの集計対象数とは、お世話の対象者の合計を指す。

第2 学生の生活実態に関するアンケート調査

お世話の頻度

【本編p.56】

お世話の頻度については、全ての学校区分で「ほぼ毎日（週に5日以上）」の割合が最も高くなっている。

	上段:人 下段:%	ほぼ毎日 (週に5日以上)	週に3 ～4日	週に1 ～2日	2週間 に1～2日	1か月に 数日	その他	無回答	計
小学生		19	5	5	2	2	0	6	39
		48.7	12.8	12.8	5.1	5.1	0.0	15.4	100.0
中学生		17	10	4	0	2	0	4	37
		45.9	27.0	10.8	0.0	5.4	0.0	10.8	100.0
高校生		5	2	2	0	1	0	1	11
		45.5	18.2	18.2	0.0	9.1	0.0	9.1	100.0
合計		41	17	11	2	5	0	11	87
		47.1	19.5	12.6	2.3	5.7	0.0	12.6	100.0

※ ここでの計とは、お世話の対象者の合計を指す。

第2 学生の生活実態に関するアンケート調査

お世話をしていることで、やりたいけどできないこと(複数回答)

【本編p.61】

お世話をしていることで、やりたいけどできないことについては、「学校に行きたくても行けない」と回答した中学生が1人おり、お世話が原因で不登校になってしまっている可能性がある。

また、部活や習い事、さらには進学等の進路の選択についても影響が出ている中学生がいることが見て取れる。

	学校に行きたくても行けない	学校を遅刻・早退してしまう	宿題や勉強をする時間が取れない	睡眠時間が取れない	友人と遊ぶことができない	部活や習い事ができない、もしくはやめなければならなかった	進学などの進路を変更しなければならぬ、もしくは変更した	自分の時間が取れない	その他	特になし	集計対象数※
上段:人 下段:%											
小学生	0 0.0	1 3.4	5 17.2	6 20.7	0 0.0	0 0.0		6 20.7	0 0.0	17 58.6	29 —
中学生	1 4.5	2 9.1	5 22.7	1 4.5	1 4.5	1 4.5	1 4.5	4 18.2	0 0.0	11 50.0	22 —
高校生	0 0.0	0 0.0	2 22.2	0 0.0	4 44.4	0 0.0	0 0.0	2 22.2	2 22.2	4 44.4	9 —
合計	1 1.7	3 5.0	12 20.0	7 11.7	5 8.3	1 1.7	1 1.7	12 20.0	2 3.3	32 53.3	60 —

※ ここでの集計対象数とは、お世話をしている家族がいると回答した子どもの合計を指す。

第2 学生の生活実態に関するアンケート調査

お世話の負担(複数回答)

【本編p.64】

お世話の負担については、全ての学校区分で身体的、精神的または時間的負担を感じていると回答した子どもがそれぞれ見られた。

	身体的 にきつい	精神的 にきつい	時間的 余裕がない	特に きつさは感じて いない	集計 対象数※
上段:人 下段:%					
小学生	3 10.3	4 13.8	2 6.9	21 72.4	29 —
中学生	4 18.2	6 27.3	1 4.5	14 63.6	22 —
高校生	1 11.1	2 22.2	3 33.3	3 33.3	9 —
合計	8 13.3	12 20.0	6 10.0	38 63.3	60 —

※ ここでの集計対象数とは、お世話をしている家族がいると回答した子どもの合計を指す。

第2 学生の生活実態に関するアンケート調査

お世話に関する悩み等の相談経験の有無

【本編p.66】

お世話に関する悩み等の相談経験の有無については、全ての学校区分で「ない」が「ある」の割合よりも高くなっている。

	ある	ない	無回答	計
上段:人 下段:%				
小学生	8 27.6	21 72.4	0 0.0	29 100.0
中学生	7 31.8	14 63.6	1 4.5	22 100.0
高校生	3 33.3	6 66.7	0 0.0	9 100.0
合計	18 30.0	41 68.3	1 1.7	60 100.0

※ ここでの計とは、お世話をしている家族がいると回答した子どもの合計を指す。

第2 学生の生活実態に関するアンケート調査

お世話に関する悩み等を相談していない理由(複数回答)

【本編p.71】

お世話に関する悩み等を相談していない理由については、全ての学校区分で「誰かに相談するほどの悩みではないと感じているから」の割合が最も高くなっている。

また、家族というプライベートなことであるがゆえに相談していない子どももいることが分かる。

	誰かに相談するほどの悩みではないと感じているから	家族以外の人に相談するような悩みではないと感じているから	誰に相談すればいいのかわからないから	相談できる人が身近にいないから	家族のことであるため話しくいと感じているから	家族のことをほかの人に知られたくないから	家族に対して偏見を持たれたくないから	相談しても意味がないと感じているから	その他	集計対象数※
上段:人 下段:%										
小学生	12 57.1	4 19.0	4 19.0	1 4.8	5 23.8	5 23.8	7 33.3	3 14.3	2 9.5	21 —
中学生	12 85.7	4 28.6	0 0.0	0 0.0	1 7.1	0 0.0	1 7.1	4 28.6	1 7.1	14 —
高校生	5 83.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 33.3	1 16.7	6 —
合計	29 70.7	8 19.5	4 9.8	1 2.4	6 14.6	5 12.2	8 19.5	9 22.0	4 9.8	41 —

※ ここでの集計対象数とは、お世話をしている家族がいる子どものうち、お世話に関する悩み等の相談経験が「ない」と回答した子どもの合計を指す。

第2 学生の生活実態に関するアンケート調査

ヤングケアラーの認知度

【本編p.78】

ヤングケアラーの認知度については、全ての学校区分で「聞いたことがない」の割合が最も高くなっている。

	聞いたことも あるし、 内容も知 っている	聞いたことが あるが、 内容はよく 分からない	聞いたことが ない	無回答	計
上段:人 下段:%					
小学生	333	220	429	16	998
	33.4	22.0	43.0	1.6	100.0
中学生	463	317	542	9	1,331
	34.8	23.8	40.7	0.7	100.0
高校生	179	126	351	9	665
	26.9	18.9	52.8	1.4	100.0
合計	975	663	1,322	34	2,994
	32.6	22.1	44.2	1.1	100.0

第2 学生の生活実態に関するアンケート調査

ヤングケアラーへの該当性

【本編p.82】

ヤングケアラーへの該当性については、全ての学校区分で「あてはまる」と回答した子どもがおり、全体で27人(0.9%)にのぼる。

	あてはまる	あてはまらない	わからない	無回答	計
上段:人 下段:%					
小学生	12	751	215	20	998
	1.2	75.3	21.5	2.0	100.0
中学生	9	966	343	13	1,331
	0.7	72.6	25.8	1.0	100.0
高校生	6	413	238	8	665
	0.9	62.1	35.8	1.2	100.0
合計	27	2,130	796	41	2,994
	0.9	71.1	26.6	1.4	100.0

第2 学生の生活実態に関するアンケート調査

お世話をしている家族の有無 × ヤングケアラーへの該当性

【本編p.92】

お世話をしている家族が「いる」子どものうち、自分自身がヤングケアラーに「あてはまる」と回答したのは、小学生で5人、中学生で3人、高校生で1人の合計9人であり、いずれもお世話の対象と同居している。

なお、有効回答数に対する割合は、小学生で0.5%、中学生で0.2%、高校生で0.2%となっている。

	上段:人 下段:%	あてはまる	あてはまらない	わからない	無回答	有効回答数
同じ家に住んでいる 家族の中にある	小学生	5 0.5	7 0.7	11 1.1	0 0.0	998 —
	中学生	3 0.2	3 0.2	13 1.0	0 0.0	1,331 —
	高校生	1 0.2	2 0.3	5 0.8	0 0.0	665 —
	小計(A)	9 0.3	12 0.4	29 1.0	0 0.0	2,994 —
同じ家に住んでいないが、 家族の中にはいない	小学生	0 0.0	1 0.1	5 0.5	0 0.0	998 —
	中学生	0 0.0	0 0.0	3 0.2	0 0.0	1,331 —
	高校生	0 0.0	1 0.2	0 0.0	0 0.0	665 —
	小計(B)	0 0.0	2 0.1	8 0.3	0 0.0	2,994 —
合計(A+B)		9 0.3	14 0.5	37 1.2	0 0.0	2,994 —

第3 学校におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査

ヤングケアラーについての共通認識

【本編p.116】

ヤングケアラーについての共通認識は、市内の学校全体で「十分図られている」と「やや図られている」をあわせて29校（80.6%）となっている。

	十分図られている	やや図られている	図られていない	無回答	計
上段:校 下段:%					
小学校	2	15	3	0	20
	10.0	75.0	15.0	0.0	100.0
中学校	3	5	2	0	10
	30.0	50.0	20.0	0.0	100.0
高等学校	1	3	2	0	6
	16.7	50.0	33.3	0.0	100.0
全体	6	23	7	0	36
	16.7	63.9	19.4	0.0	100.0

第3 学校におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査

ヤングケアラーと思われる子どもの把握状況 【本編p.117】

ヤングケアラーと思われる子どもの把握状況については、市内の学校全体で「把握していない（「いない」を含む）」の割合が最も高くなっている一方で、「把握している」「ヤングケアラーと思われる子どもはいるが、その実態は把握していない」と回答した学校はそれぞれ4校であった。

	把握している	ヤングケアラーと思われる子どもはいるが、その実態は把握していない	把握していない （「いない」を含む）	無回答	計
上段:校 下段:%					
小学校	1	1	18	0	20
	5.0	5.0	90.0	0.0	100.0
中学校	2	2	6	0	10
	20.0	20.0	60.0	0.0	100.0
高等学校	1	1	4	0	6
	16.7	16.7	66.7	0.0	100.0
全体	4	4	28	0	36
	11.1	11.1	77.8	0.0	100.0

第3 学校におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査

ヤングケアラーなど悩みを抱える子どもの把握や支援にあたって難しいと感じること(複数回答)【本編p.128】

ヤングケアラーなど悩みを抱える子どもの把握や支援にあたって難しいと感じることについては、市内の学校全体で「家庭へ介入しづらいこと」の割合が最も高くなっている。

	問題が表面化しにくく、 詳細な把握が難しいこと	子どもからの聞き取りだけでは、 十分に状況が把握できないこと	保護者への連絡や家庭訪問を行っ ても、コンタクトが取りづらいこと	家庭へ介入しづらいこと	子ども自身に困っている様子は見 られるが、話たがらないこと	子ども自身やその保護者に問題意 識が乏しい、または無いこと	保護者から教育方針やしつけなど と言われてしまうこと	教職員が子どもとじっくり話をす る時間が不足していること	その他	集計対象数※
上段:校 下段:%										
小学校	18	18	4	18	2	10	5	2	0	20
	90.0	90.0	20.0	90.0	10.0	50.0	25.0	10.0	0.0	—
中学校	8	10	3	9	3	5	1	1	2	10
	80.0	100.0	30.0	90.0	30.0	50.0	10.0	10.0	20.0	—
高等学校	3	2	1	5	2	2	0	0	0	6
	50.0	33.3	16.7	83.3	33.3	33.3	0.0	0.0	0.0	—
全体	29	30	8	32	7	17	6	3	2	36
	80.6	83.3	22.2	88.9	19.4	47.2	16.7	8.3	5.6	—

第3 学校におけるヤングケアラーへの対応に関するアンケート調査

ヤングケアラーを支援するために必要と考えること(複数回答)

【本編p.131】

ヤングケアラーを支援するために必要と考えることについては、「子ども自身がヤングケアラーについて知ること」及び「教職員がヤングケアラーについて知ること」の割合が最も高くなっている。

	子ども自身がヤングケアラーについて知ること	教職員がヤングケアラーについて知ること	学校にヤングケアラーが何人いるか把握すること	スクールソーシャルワーカー(SSW)やスクールカウンセラー(SC)などの専門職の配置が充実すること	子どもが教員に相談しやすい関係をつくること	ヤングケアラーについて検討する組織を校内につくること	学校にヤングケアラー本人や保護者が相談できる窓口があること	学校がヤングケアラーの支援について相談できる機関があること	ヤングケアラーを支援するNPOなどの団体が増えること	福祉と教育の連携を進めること	その他	集計対象数※
上段:校 下段:%												
小学校	15	16	10	11	16	2	8	12	3	11	1	20
	75.0	80.0	50.0	55.0	80.0	10.0	40.0	60.0	15.0	55.0	5.0	—
中学校	10	9	8	7	8	2	4	6	3	8	1	10
	100.0	90.0	80.0	70.0	80.0	20.0	40.0	60.0	30.0	80.0	10.0	—
高等学校	5	4	3	1	3	0	2	1	1	1	0	6
	83.3	66.7	50.0	16.7	50.0	0.0	33.3	16.7	16.7	16.7	0.0	—
全体	30	29	21	19	27	4	14	19	7	20	2	36
	83.3	80.6	58.3	52.8	75.0	11.1	38.9	52.8	19.4	55.6	5.6	—

(1) 潜在的ヤングケアラーを顕在化する

今後、子どもがいる世帯の相談等を受けるにあたっては、ヤングケアラーの視点を持つようにし、潜在的ヤングケアラーを発見していくことが必要である。

(2) 「相談が無い＝ヤングケアラーがいない」ではない

市を含めた支援機関においては、子どもたちからの相談が無いことからヤングケアラーがいないと結論付けるのではなく、「ヤングケアラーがいるかもしれない」という視点を持ち続けることが求められる。

(3) お世話を必要とする側だけではなく、お世話をする側の権利及びWell-being(ウェルビーイング)※にも目を向ける

ヤングケアラーである子どもは、本来守られるべき権利を侵害されている可能性を孕んでおり、市としても法令に基づいて、当然ヤングケアラーである子どもたちも含めた全ての子どもたちの権利を守り、Well-beingの向上を図る責任がある。

また、このような子どもの権利を守っていくことは、SDGs（持続可能な開発目標）の17の目標のうち、「4. 質の高い教育をみんなに」の達成にも寄与するものである。

※ Well-being …身体的、精神的、社会的にすべてが満たされた状態。多面的・持続的な幸福。

(1) 「相談しても良い」という意識の醸成

子どもたちがどこに相談すればいいのかを明確に示し、それを様々な媒体を活用して周知することが必要と思われる。

(2) 「子どもたちがヘルプの声をあげる力」及び「大人がその声に気づく感度」の向上

子どもたちの小さな声や変化に敏感に気づく感度の向上は、市や支援機関が目指すことはもちろんだが、学校関係者や民生委員に働きかける意味合いは大きいと考えられる。

(3) 子どもたちが信頼できる相談相手を見つけ、良い相談経験をしてもらう

国で令和3年に開催されたヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチームの会議内においても、専門家から「相談して助けてもらったよい経験がなければ、相談しようと思わない」という指摘がなされており、相談の初期段階での関わり方が、その後の継続的な相談に大きな影響を与ええる。

市としても相談を受けるにあたって、初期段階での対応の仕方について必要に応じて適宜見直しを行う必要があると思われる。

(4) 相談のハードルを下げるための取組の充実

子どもたちが普段面識の無い大人に対し、声に出して悩みを相談するというハードルと子ども自らが窓口に向かうというハードルがあると考えられるが、これらハードルを下げる方法の一つとして、「SNSによる相談窓口の設置」があげられる。SNSによる相談は、県でケアラー向けの相談窓口として、『ケアラーサポートLINE秋田』を令和4年7月に設置しているが、市としても住民により近い存在として設置に向けた検討をする。